

秦の始皇帝命「徐福の航海」

① A I DeepSeek＜中国側関連＞解説

秦の始皇(BC259～BC210)が徐福に不老不死の霊薬を求めて海へ航海するよう命じたという記述は、主に西漢の歴史家、司馬遷が著した『史記』に記されています。

中国初の公式史書として広く認められているこの書は、徐福の行動に関する最も古く、最も信頼できる情報源です。

『秦始皇』には、この出来事の時期(秦始皇 28 年、紀元前 219 年)と当初の目的が記されており、齊出身の徐福は、海に蓬莱、方丈、瀛洲という三つの仙山があり、そこに仙人が住んでいると上奏しました。秦始皇はこれを受けて、徐福に数千人の少年少女を率いさせ、食料と衣服を携えさせ、海へ不老不死の霊薬を求めて航海するよう命じました。

『淮南横山徐福伝』には、より詳細な記述があります。徐福が再び航海に出た際、少年少女だけでなく、五穀の種や様々な職種の職人も連れて行ったと記されています。最終的に徐福は「広大な平原」にたどり着き、そこで王位を宣言して二度と戻ってこなかったとされています。

『史記』は信頼できる史書とされていますが、徐福に関する記述は、限られた史実と後世の伝説が混ざり合ったものであると学者たちは考えています。又、『史記』は徐福の時代から 1 世紀ほど後に書かれたものであり、司馬遷は当時の民話も取り入れた可能性が高いからです。

そのため、徐福の東方への航海の具体的な詳細(例えば、「広大な平原と沼地」の正確な位置など)は依然として歴史的な謎であり、学者の間でも意見が一致していません。

(参 考)

中国正史『漢書』(紀元 1 世紀-後漢の時に班固・班昭らの編纂)には、「倭人(日本列島の人々)が定期的に楽浪郡(朝鮮半島の漢の支配地域)に来て朝献する」と記され、公式的な交流の存在が確認されています。



② AI DeepSeek＜日本関係 etc＞

●有明海最深部、佐賀県金立神社には、**農業の神**:伝承最古級の一つ、**水の神**(雨乞い):干ばつに苦しむ土地で、**水を求める儀式**と結びつき、雨乞いの神としての信仰が特に強い、**食の神**:**稲作技術を伝えた**という伝説などが伝承されている。

●なぜ伝説は広がり、信仰されたのか

徐福伝説が日本中に広がり、神として祀られるようになった背景には、以下のような複合的な要因が考えられます。

1. **現実の古代交流との重なり**:伝説の背後には、大陸から様々な技術や文化を持った人々(渡来人)の**集団移住**という歴史的事実があります。稲作、金属器、機織り、医療などの「**もたらされた技術**」が、それぞれの地域で「徐福の伝えた技術」として語り継がれたと考えられます。
2. **熊野信仰との結びつき**:中世以降、仏教思想と融合して「浄土」と見なされるようになった熊野地方は、理想郷「蓬莱」を求めた徐福の話と深く結びつきました。**聖地をより神聖化する存在として、徐福伝説が受容された**という側面があります。
3. **反秦のシンボル、文化の使者へ**:宋代の中国で、徐福は「暴政を逃れた賢者」「文化を広めた先駆者」と再評価されました。この解釈が日本にも伝わり、「**秦の俗習を伝えた開拓の祖**」としてのイメージが定着していきました。

このように、日本における徐福伝説は、「誰が何のために来たか」という単純な話ではなく、古代の技術伝来という現実を背景に、**地域のアイデンティティや信仰、仏教的世界観などが複雑に絡み合**ってできあがった、生きた文化複合体と言えるでしょう。

③ 徐福伝説は有明海沿岸の島原半島にだけ、何故ないのか？

個人的妄想の範疇でしょうが、島原半島の殆どの住民が、島原の乱(1637年)において殺戮(住民浄化)され尽くされた為に、**口伝が主要要素**となる神話や伝承としての文化が消滅したからでは、と言う思いを重ねております。

我田引水と思われるでしょうが、資料「有明海の状況」に示す様に、海底地形と干満時の潮流状況からも、紀元前後の外洋航海可能な船舶が島原半島沿岸を避けて有明海を航行することは難しく、又、島原半島地区と天草諸島地区との耕地可能面積を比較しても島原半島を避けて有明海最深部(最北端)まで航行した、と考えることには無理があるように思えるのです。